芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 43　54. 8

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・尾　登　一　信

第3回全国高等学校総合文化祭開催にあたって

大分県教育委員会教育長　江　藤　　博

15周年を迎えた大分県芸術文化振興会議を心からお喜び申し上げます。

また、「芸振」会報も県下の芸術文化界の活動源として年々その内容も豊富となり、質の向上も目ざましいものになってきていますが、これも、県下の芸術文化を支える各団体・関係者の大きな力となっていることに、改めて感謝申し上げます。

さて、このたび芸術文化振興会議の構成メンバーの一つであります大分県高等学校文化連盟の協力を得て「第3回全国高等学校総合文化祭」を開催いたしますが、ご承知のように、これは高等学校生徒による芸術文化の祭典として、全国47都道府県すべてがいずれかの部門に参加するという、文字どおり全国規模の文化祭です。

3年間の高等学校生活を、より豊かに、より充実したものにするため、クラブ活動・部活動の占める役割と重要性については、今更申しあげるまでもないことです。

しかし、従来ともすれば、芸術文化関係のクラブ活動・部活動には全国的規模の総合行事もなく、今一つ盛り上がらなかったのが現状ですが、一昨年より、文化庁の指導で、この事業が起こされ、高校生自ら芸術文化活動に参加することを推奨し、参加を通じて情操豊かな創造性に富む人間の育成を図ることとなりました。

また、このことにより高等学校における芸術文化関係のクラブ活動・部活動がいっそう推進され、その向上普及が図られることになりました。

私は、高等学校における芸術文化活動が、彼等の生活にみずみずしい心を回復させ、うるおいのある生活を約束し、自立と連帯の精神に満ちた明日への生きがいを作りだすものと信じています。

7日間、約2万人の生徒により、各会場で、力いっぱいの演技・演奏が披露され、すばらしい作品が展示されるわけですが、若さと希望に満ちた生徒たちが、友愛の輪を広げ、相互の交流と研さんを深め、すぐれた芸術文化を創造する意欲に胸をふくらませていますだけに、すばらしい文化祭として成功することを願っています。

ところで、只今、芸術文化振興会議の手によってすすめられています「大分県芸術文化基金」が会員の皆さんによって設立された暁には、「大分県芸術文化の将来を担う新人の育成」に大いに役立つものと思われます。

今回の全国高等学校総合文化祭を通じて、現在の高校生が、やがて各県の輝かしい文化の歴史と伝統を継承していくことを強く期待したいと思います。

どうぞ、参加する高校生に対して、皆さん方の温かいご協力と惜しみない拍手をお願いいたします。

文化基金にご理解とご協力を

―― 芸振事務局長就任にあたって ――

県芸振会議事務局長
県教育庁文化課長　尾　登　一　信

12年の現場生活から、再び文化課長（芸振事務局長）として戻ってまいりました。

想えば15年前、第１回の芸術祭が企画されて、故藤沼恵先生ご指導による「森のうた」大合唱が行なわれた時、社会教育課の課員として、多分に批判的だったことを反省しています。

当時の社会教育課長（文化課はまだ出来ていませんでした）は鷲尾正昭氏（現国立博物館総務部長）で、彼は大分合同新聞の宮瀬香多士氏と連絡をとりつつ、毎晩のように練習会場である荷揚町小学校の体育館に激励に出掛け、立派に公演を成功させました。

今さらながら、視野の狭い、展望のもてなかった自分を見せつけられたようで、完全に兜をぬいだことを思い出します。

芸術祭に重なって生まれた大分県芸術文化振興会議も、今年で15年目を迎え、構成団体の拡がり、個人会員の増加活発な創作活動と、今では確固とした大分県勢の一翼をになう存在となっています。

その事務局長としての任がつとまるかどうか、鷲尾先輩のような卓見が持てるかどうか、全く不安でありますが、とにかく一生懸命努力致します。皆さんのご協力を切にお願い申し上げます。

扨、７月議会に提案の大分県芸術文化基金条例は、芸振会員の熱意と、県当局のご理解、そして、マスコミや各方面のご協力のおかげで、窓口を開くことが出来ました。

大変な難産でしたが、これからが大変だと思います。何が何でも最低３億の積立てをしなければならないのです。その責は一にかかって芸術文化振興会議にあります。

文化人の行動力と底力を発揮するのは、このことをおいて外にはないと思います。

大分県芸術文化百年の大計のために、そして芸振の第二の誕生たるべく、総力を結集して頑張りましょう。ご挨拶に外れた文になりましたが、お許しください。

[redacted]

文化基金についての私見

文化基金と地域文化活動

佐伯市中央公民館係長
佐伯文化振興会事務局　菅　淳　一

文化基金を自らの手で作ろうと、関係者が動きだしたことは、いいことだと思う。今までは、どちらかというと、文化活動は行政に頼ろう、あわよくば、〃おんぶにだっこ〃をしてもらおうとする姿勢が、ないでもなかったような気がする。その結果として、期待したほど潤沢な恩恵を受けたこともないようである。そんな状況の中で、みんながんばって、独自の力で現在の力を作って来たのではなかろうか。

この力をもっと結集し、これにもう一つ行政の力が加われば、いっそうすばらしいことにちがいない。

文化基金作りとは、この実現に他ならないのだろう。

もっと早く手がけるべきだった、と今にして思っている。条例化の見通しも明るいようでうれしい。

しかし、この意義が、県文化の中心地大分を離れた、私の町のような小さな都市、そして町村津々浦々に、どれだけ浸透しているであろうか。私自身、人を説得するだけの力がまだ体にない。

この文化基金が、地方の市町村の文化活動に、どのような具体性をもって返って来るのか、漠然とした理念でなく具体的なことがらとしての返りを知り納得したいのである。

華やかな文化活動だけが文化ではない。小さい町や農山漁村の、現在行なわれている活動、促進させるべき活動、新しく誕生させるべき活動等を調査し、見つめ、これらに文化基金がいかに力になるかがしめされるならば、文化基金の運動が、今よりもっと積極的な力強いものになるだろうと、思われる。

[redacted]

基金は「心の栄養」、制度の実現をめざして

日本詩道会総本部事務局長
県芸術祭運営協議会委員　後　藤　隆　霊

偏向した経済主導の社会の流れは、日本人の美風とされた礼節や義理そして心の豊かさを見失う始末となった。

こうした日本の精神的危機のなかにも、人の心は常にその豊かさを欲求している。「心の栄養」それは作物栽培に土壌を耕すに等しい知の教育で、これをよりよくするものは、肥料にあたる芸術文化による情操である。国の繁栄は政治・経済の安定といわれるが、国を形成する人々の人間らしい行動によるか否かが国の興亡基盤と言えよう。つまるところ人間の心だ、わが国の将来を憂うるとき人間づくりを痛感する。

今回、大分県芸術文化振興会議が郷土芸術文化の画期的発展の展望に立って、心豊かな人づくりのため「芸術文化基金」の設定に乗り出しているが、加盟団体からの募金活動、県条例化の請願等々数多き問題をかかえ当局のご苦労が察せられる。でも基金設定は人間の心を豊かにする要素づくり、また祖先が創造し伝え来った、文化遺産を継承発展させる資源づくりを考える。故に基金制度の実現を待望しご協力を責務と感じている。

幸い本県には輝かしい文化の歴史と伝統がある。これを継承創造し後世に遺すことこそ、私どもの義務であり、人の心を豊かに培うものと信じている。斯くして基金制度が軌道に乗り、芸術文化活動のエネル源の役割を果たすことになれば、郷土の芸術文化の振興に大なる成果が期待される。

ただ基金制度設立の今日の過程にあたっては、加盟各団体が前向きの姿勢と募金活動等の責務を先ず果たし、将来に向かっては、基金の適正運用に留意し、基金依存の私欲的行動は厳に慎しみたいものである。

ともあれ、大分県の芸術文化振興の成否は、基金設定という大事業を早々に達成することで、加盟団体が連帯感をもって、難問題に対処し最大の努力をしなければならない。

文化基金についての私見

広く県民の理解と協力が必要

大分県美術協会事務局長
自由美術協会会員　脇　正　人

去る7月2日の報道で、ホッとしたのが偽りのないところです。私見ということですが、しっかりしたものをもっているわけでもありませんので、県美協のことについて書いてみます。文化基金の全容については、会員の皆さんに理解して貰うために、幾度となく会議を開き、やっと54年6月の総会で決定をみました。この間各部会毎にいろいろ討議を重ねてきましたが、決して平坦な道ではなかったようです。それだけに関係された方々の苦労は大変なものだったと思っています。

部会・総会以後、県下の各支部で集金が始められているとの連絡を今は、受けています。

又、知事さんの意思表示があってからは、気分的に明るさを取り戻したようです。

今後、考えなければならない点として次の3つをあげます。

- 文化基金条例（これに類似したもの）を完全実施している県は、九州ではまだ一つもありません。それだけにどんな問題に遭遇するか知りませんが、多くの団体で構成されている芸振としては、長期的な展望を、しっかり持つべきでしょう。
- 運営については、民主的・合理的に実施し、各団体が納得のいくように力を入れるべきだと思います。
- 文化団体や、協賛者のみでなく、広く県民の理解と協力が必要でしょう。

文化基金のねらいは、立派なものと思いますが、その効果を十分にあげさせる為、これから努力をしなければと思っています。

第三回全国 高校総合文化祭を無事終って

大分県高等学校文化連盟理事長　五島辰夫

八月一日、文化庁長官のご臨席を仰いで、華々しく開幕した第三回全国高校総合文化祭は、先般、七日間の催しをすべて滞りなく終えて静かに終了式を迎えた。

思えば四年前、大分県高文連が『高校県体の文化版』として、県高校中央文化祭を竹田市で挙行し、これが翌年から全国各県にすぐさま伝染して以来、近いうちに全国版を引きうけねばならなくなるのは必然のことであった。そして現実のものとなった。

幕を開けてみて、大分県高文連のねらいはおおむね満足に遂行された。各会場は、ほぼ大入り満員で、舞台上は、高校生とも思えぬうまい演技・演奏が次々に展開し、芸術文化面で県下高校生に「黒船来航」のような刺戟をあたえた。

今回の正式種目としてステージに上れる部門も、種目になく「縁の下の力もち」で頑張るものもみなこだわりなく高文連の全組織をあげてこの行事を遂行した。その結果、第一に勝ち負けのあるスポーツとちがって、スマートな形で郷土愛・母校愛をうたいあげた大会となった。第二に「生徒を前面に出す」という方式がすべてにとられたため、前二回とはひと味ちがった親しみのあるふん囲気をかもしだした。そして高校生に自信・誇りをもっとも望ましい形で持たせた。第三に、演ずるものも観るものも、よき青春のよき思い出を残した。

こうして、五〇〇校からの出演者、八部門で、のべ二万人の観客動員、数々の着想で大分大会は空前のものとなり、全国高校文化祭のひとつの典型を生み出した。

さて、ここに至るまで、会議招集や財政の面倒をみて下さった大分県教委、無償の援助を惜しみなくつぎこんでくださった各県民文化団体、足で取材して回って県民に報道してくださった地元報道機関などに深甚の感謝をのべたい。

最後に、ハイレベルの「全国」に負けないよう大分チームを育てあげた各高校の先生方と、これに応えて汗を流して特訓に甘んじた生徒たちに心からお礼を申しあげたい。

第3回全国高等学校総合文化祭日程

会場 / 種目 / 期日	第1会場　大分県立芸術会館		第2会場	第3会場	第4会場	大分市街地
	文化ホール	美術館	大分文化会館	大分県立総合体育館	別府国際観光会館	別府市街地
	総合開会式 演劇	美術工芸 書道	邦楽・吹奏楽	マーチングバンド バトントワーリング	合唱・吟詠	記念パレード
第1日 8月1日(水)	13：00～16：30 総合開会式 開会式 交換会	10：00～17：00 テープカット 美術工芸 書道展				11：00～12：00 マーチングバンド バトンワーリング による市内パレード (大分市)
第2日 8月2日(木)	9：30～15：30 演劇上演	9：00～17：00 美術工芸 書道展	10：00～16：20 邦楽演奏 16：20～17：00 講評・閉会	13：00～16：25 マーチングバンド バトントワーリング演技 16：25～17：00 講評・閉会	9：50～16：25 合唱 16：25～17：00 講評・閉会	9：30～10：30 マーチングバンド バトントワーリング による市内パレード (別府市)
第3日 8月3日(金)	9：50～16：20 演劇上演	9：00～17：00 美術工芸 書道展	10：00～16：30 吹奏楽演奏 16：30～17：00 講評・閉会		10：00～14：25 吟詠 14：25～15：00 講評・閉会	
第4日 8月4日(土)	9：50～12：10 演劇上演 13：00～15：00 研究分科会 15：00～17：00 講評・閉会	9：00～17：00 美術工芸 書道展				

美術工芸・書道展8月7日(火)まで

青春の讃歌
「バトン トワーリング」

大分東明高校・バトン部主将

船津弘子さん

〃空中に高く挽ね上げたバトンがキラキラと輝く、回転しながら落下してきたところを美事に受け止める〃満場の観衆からドッとあがる拍手、それに答えるかのように満面に笑みをたたえた船津さん、軽快なクラシックディスコのリズムに乗ってバトントワーリングは続く。8月2日、県総合体育館でのひとこまである。

こんなウルトラCの技術を、東明高校の船津弘子さんは今年の2月から6か月間、11回の合宿を重ねた特訓で生みだした。

東明高校のバトン部の歴史は古く、今から15年前の東京五輪大会の聖火リレー誘導隊として発足したのに始まっている。現在部員は32名、船津さんは今回の全国高校総合文化祭参加の1か月前に主将として選ばれた。

中学時代から高校とテニス部だった彼女は今年の2月、指導の堀加津子先生に見込まれてスカウトされたもの。

素直な性格と、プロポーションの良さ、自分自身との闘いを強いられる練習、それを克服した根性が基礎から応用へとメキメキ腕をあげた。バトントワーリングのリーダーは、あくまで技術の追求と、音楽に対する適応力が要求される。2年生で主将に選ばれた彼女は、それなりの資質があったとは言え、1日3時間以上の厳しい練習と指導に耐えた結果でもあった。

テレビを見ることも、趣味の時間を見出すことも一切やめて、バトントワーリングに青春を賭けたこの半年間であった。

来年1月に行なわれる全国コンクール入賞をめざして今日も、きびしい練習に余念がない。 身長163㎝・体重51㎏・大分碩田中学卒・大分市新川出身。 (F)

「バトン トワーリング」への理解と普及を

大分東明高校・教諭

堀　加津子 氏

県下における「バトントワーリング」は普及が遅く、なじみが薄いのでその内容や技術などの実態も一般にはほとんど理解されていないのが実情である。

堀加津子先生はこの道の先達の一人である。大分国体の前年、昭和40年に竹田市の小学校から平松学園の前理事長に懇請されて着任した。以来同校の保健体育科を担当すると共に、バトントワーリングに情熱を傾けてきた。

堀先生も専門は球技（テニス）だったと言うが、バトンの魅力に取りつかれてからは、進んで講習会などに出向いて理論と技術の研修を重ねた。

今回、大分県でのマーチングバンド、バトントワーリング部門は初めての公開である。その準備と指導には約1年間を要し、特に苦心があったと言う。

「自分の腕の長さより5㎝長く、重さ約 230g」のバトンを操作するのに、20種あまりの基本型があり、体の面、床の面に常に平行・垂直の動きと回転が加わる。それに指先き、腕、首、胴、四肢、全身とバトンの技術は限りないテクニックを秘めている。音感との適応がまた不可欠の要素でもある。

練習はほとんどが自分自身との闘いであり、苦心のポイントは、チーム全体のレベルを均一化させ、より高度な技術の種類をどれだけ組み込めるかにかかっていると言う。体全身にバトンが当たってアザが出来る、これを「初心者マーク」と先生は笑って言われたが、いかにも厳しさがにじみ出ていた。今度の大会を多くの小・中学生に見せたかったと言う、より健全で明るいものであるからだ。

これまで東明高校バトン部は、数えきれないほどの社会的行事に参加貢献してきた。これからもそうだろう。日本女子体育大卒・竹田市出身。 (Y)

「文芸大分」創刊にあたって

「文芸大分」編集長　肘村康一

芸術という名の持つ魔性のようなものに惑かれて、若者達は中央へ中央へと流れ込んでゆく。そしてそれらの大部分は、その彼の人生に於て心身共に最も活力盛んであろう時期を、ただひたすら飢えと焦燥とで費やそうとする。「ハングリー」彼等の芸術家たる第一歩の合言葉である。私にはどうもその言葉の位置に不満がのこってしまう。それはともあれ、東京では、まともな職に就かず、日々芸術とかいうもののために精進するとの大義名分を掲げて真昼間から所在なく右往左往する若者が万といるという。その生活振りは、端でつつましい生活を送っている者からみれば、実に気侭で無責任にみえるのは、才能無き故の僻みかもしれないが、何か妙に肩寒さを感じずにはいられない。果たして、人間としての生活と切り離された芸術とは如何なるものなのか、私にはよくわからない。しかし、現在、日本の中央から流出する芸術たるものは、申し合せでもしたかのように、日々あくがない生活との闘いを続けている者とは無縁なものばかりのような気がし、それが又、悲しいことにもてはやされ、情報社会が流行を作ってしまう。

「文芸大分」が何故創出されたか、というのは、文学の世界に於ての同様な疑問から、今一度冷静な眼でそれをみつめ、考えなくてはならないのではなかろうかとの思いの志が集まった必然の結果に等しい。同人達の作業は、各人の日々の生活の中での、書かざるを得ない叫びのみを発表してゆくことしかなく、それは芸術のための学問でもなく、流行物として金になるものでもない、ただ一人の人間としての生きるプロセスのようなものなのかもしれない。そのためには現実社会に深く根を下し、常に世の動向を鋭くみつめる要があり、生活者達は誤魔化されてはならないのだと思う。「文芸大分」はその欠乏を「ハングリー」とおきかえたい。さらに多くの仲間を待っている。

日田文化活動の現状

日田文化連絡会事務局長　中津留　鉄男

宵祭りで熱中した素人演芸の舞台から、戦後の文化運動は始まりました。そして、そのことに飽き足らなくなった若者たちは、コーラス・演劇・ブラスバンドと、春の来迎の雪崩のごとく、サークルを組織し活動を拡げて往きました。更にその手は、文芸誌に俳句に短歌・日舞・社交ダンスと限りなく、色彩やかな花を咲かせたのです。

それから三十年。いくつかの節目を経て往きました。その一つに、六十年安保を境として創造活動のサークルが、職場から街中から三つ四つと解消して逝きました。それに替わって目を見張ったのが、お茶、お花、ピアノ、お琴、書道、謡曲といった、お稽古ごとに通う娘さんたちの、あまりにも多い姿でした。七十年代に入ると、生活の余暇を愉しむ市民の中堅層が、吟詠・民踊に奔り、昨年からは高年層まで引き込んでの民謡ブームとなり、それぞれの団体は、桁違いの会員数を集めて普及しています。相前後して、絵画・写真・小型映画・陶芸の美術部門も、めきめき底辺を拡げ、創造活動唯一の大きな団体と育っていきました。この外、児童文化の向上と、情操教育の目的で、五十年代にはバレーと人形劇、影絵などが、小・中学校の先生たちの手で創設されました。

現在、日田文化連絡会に所属する団体は三十五。その3分の2は芸能部門で、会員数でも創造団体総会員数をもっても、一芸能団体の会員数に及ばない現状で、市民の思考推移が窺えるようです。特に、若者たちの音楽熱が大人との音感のズレが禍いし、会場が無いことも加味されて末組織のままで放置されている。この事が、私たち組織の老化に繋らなければと心配しています。

或る席で、青少年非行化の問題に関連し、公民館のサークル活動でも、このような問題は取りあげられないかと話が出た。行政担当者は、堅い話を持ち出すと集合が悪くなると答えたが、この課題を採りあげる是非は抜きにしても、私は自分たちの組織内部を振り返り、サークル創りの目的は果たしてなんだったろうかと、新たな疑問に立っているのです。

昭和53年度決算書

収入の部

区分	当初予算額	補正予算額	予算現額	決算額	差引増減額
補助金収入	870,000	0	870,000	870,000	0
県費補助金	870,000	0	870,000	870,000	0
会費収入	644,000	24,000	668,000	668,000	0
団体会費	504,000	30,000	534,000	534,000	0
個人会費	140,000	△ 6,000	134,000	134,000	0
雑収入	267,368	0	267,368	265,200	2,168
広告料	260,000	0	260,000	260,000	0
預金利息	7,368	0	7,368	5,200	2,168
繰越金	81,632	0	81,632	81,632	0
合計	1,863,000	24,000	1,887,000	1,884,832	2,168

支出の部

区分	当初予算額	補正予算額	予算現額	決算額	差引増減額
賃金	360,000	0	360,000	360,000	0
報償費	155,000	0	155,000	155,000	0
旅費	175,000	△70,000	105,000	99,670	5,330
需用費	1,040,000	85,000	1,125,000	1,120,960	4,040
印刷消耗費	1,010,000	80,000	1,090,000	1,086,360	3,640
食糧費	30,000	5,000	35,000	34,600	400
役務費	90,000	0	90,000	90,000	0
通信運搬費	90,000	0	90,000	90,000	0
使用料及賃借料	23,000	7,000	30,000	29,375	625
予備費	20,000	2,000	22,000	8,340	13,660
合計	1,863,000	24,000	1,887,000	1,863,345	23,655

次年度へ繰越　1,884,832－1,863,345＝21,487

昭和54年度予算書

収入の部

区分	当初予算額	前年度予算額	比較増減	積算基礎
補助金収入	870,000	870,000	0	
県費補助金	870,000	870,000	0	
会費収入	668,000	668,000	0	
団体会費	528,000	528,000	0	3口 6,000×88 ＝528,000
個人会費	140,000	140,000	0	1口 2,000×70 ＝140,000
雑収入	295,513	267,368	28,145	
広告料	290,000	260,000	30,000	
預金利息	5,513	7,368	△ 1,855	
繰越金	21,487	81,632	△60,145	
合計	1,855,000	1,887,000	△32,000	

支出の部

区分	当初予算額	前年度予算額	比較増減	積算基礎
賃金	450,000	360,000	90,000	事務局員賃金 75,000×6か月 ＝450,000
報償費	135,000	155,000	△20,000	年鑑執筆謝品代 2,000×35＝70,000 年鑑編集謝金 5,000×9＝45,000 芸振編集謝金 5,000×4＝20,000
旅費	100,000	105,000	△ 5,000	芸術祭参加行事調査芸術文化基金説明会等
需用費	1,041,000	1,125,000	△84,000	
印刷消耗費	1,006,000	1,090,000	△84,000	芸振70,000×4 ＝280,000 年鑑850円×800部 ＝680,000 事務用品46,000
食糧費	35,000	35,000	0	理事会 事務局会議
役務費	90,000	90,000	0	
通信運搬費	90,000	90,000	0	切手 ハガキ
使用料及賃借料	30,000	30,000	0	理事会 総会会場費
予備費	9,000	22,000	△13,000	社教団体負担金 払込手数料
合計	1,855,000	1,887,000	△32,000	

《れんさい》 豊後水道の文芸 その3

大分大学教授　佐々木　均太郎

保戸島と「海南小記」

「海南小記」は、日本民俗学の創始者柳田国男が大正十年三月～五月、朝日新聞に連載したユニークな紀行文である。柳田は、現在の臼杵市から船で保戸島→佐伯→大島→蒲江と豊後水道を南下し、はるか沖縄まで海上の道を行く。特に豊後水道では保戸島がえらく気にいって郵便局長の家に二晩泊っている。それが「穂門の二夜」の文である。

「斯んなうれしい島にならば、海が荒れて閉込められても本望だと、只ちょっと考へて見たばかりで、もう早其通りに為って居た。…それから何遍も村の中をあるいた。全体に平地はちっとも無い島である。見上げるやうな傾斜地に同じ様な家が境も不分明に建て続けてある。二階と下と別々に、入口を路へ付けて、二戸三戸が一棟の中に住んで居る。肥前の島栖から来た薬屋がこんな事を謂った。よほど気を付けぬと同じ家へ二度入って笑はれると。家の方でも今一段と不必要な訪問者に対しては、おまへは先程も来たでは無いかと謂ふと、本当にさうかと思って、慌てて還って行くと村の者も謂った。」

今は保戸島も、どんどんと近代建築に模様がえされていっているが、見上げるような傾斜地の姿は、柳田が見聞した当時と少しも変っていない。また、柳田が「つまり島一つが大家内の一家のやうなものだ」ととらえていることも変っていないようだ。

柳田は、この豊後水道の地の島をこよなく愛して「永くなつかしいのは、豊後では臼杵湾頭の津久見島である。山が険しい為か此島ばかり保安林に編入せられる以前も一向に斧斤を知らず、隙間も無く茂った緑の樹の中から色々の鳥の声が遠く波の上の舟まで聞える。今は目白の名所だと謂ふが、ツグミと呼ぶのもやはり鳥の名から始まったやうに思ふ」と記している。臼杵湾に浮かんでいるのに、なぜ津久見島と呼ぶのかの疑問も柳田説で解明されそうだ。案外、津久見市もそのあたりが先行してできた地名であるのかも。

―つづく―

＜芸振だより＞

文化基金についての経過

昭54.4.16（月）「芸振理事会」　23会議室
基金の今後の日程、方法について協議した。
① 芸振加盟団体への募金と署名のよびかけ
② 発起人会について

昭54.5.1（火）「芸振会議役員会」県総合庁舎・53会議室
一般県民各位に対する基金の募金方法について検討し、そのための発起人について協議

昭54.6.11（月）「芸振会議臨時役員会」県総合庁舎・43会議室
募金状況と知事への陳情について協議
平松知事をたずね、基金運動への理解と条例化の実現を陳情した。

昭54.6.7～14　「文化基金設立発起人」に県下政財界の知名士をあげ、会長が個別訪問のうえ、依頼する。

昭54.6.21（木）午前中芸振理事会、午後総会を県婦人会館で開催、文化基金についてのこれまでの経過、現状報告をする。

昭54.6.26（火）文化基金条例案を県教育委員会に提案承認される。
昭54.6.26（火）財政課より、芸振自体の募金の確約を求められ、会長が口答で約束する。

昭54.7.4（水）「芸振会議臨時役員会」県総合庁舎教育委員室
・現状報告（条例と県の助成について）
・知事へお礼　　議長・副議長へ陳情
・今後の取組みについて、臨時総会を8月9日に開催

消　息

県芸振会議・役員ならびに事務局の異動

◎副会長　土屋　元造氏　退任（鶴見丘高校長へ）
〃　帆足　敏郎氏　就任（大分女子高校長 高文連会長）
◎事務局長　浅田　弘明氏　退任（教育庁総務課長へ）
〃　尾登　一信氏　就任（教育庁・文化課長）
◎事務局員　太田　悠一氏　退任（県立図書館へ）
〃　二宮　重幸氏　就任（文化課、主任社会教育主事兼文化係長）

ヤマハとデアパソン
ピアノ
大分県特約
白沢ピアノ店
大分市若松通り
TEL 32－3930